

救命

小桜 陰子

命を大切に。あからさまなメッセージを含んだ寒い小芝居を、舞台の上のスクリーンは延々と流していた。外ではチャイムが鳴っている。五時間目が終わったのか。急に活気を帯びる外とは裏腹に、この薄暗い体育館では誰からか発せられたどんよりした眠気に覆われていた。

「これ、あと何分で終わるんだろうね」

隣に座る朝子に、舞はボツッと呟いた。右手で口を覆った朝子は、空気を含んだ声でさあね、と答えた。

道徳の、二学年合同での授業だった。舞の眠気の波がピークに達した頃、スクリーンでは一つの区切りを終えた女性が、命の大切さについてつらつら演説していた。

中間テストの結果が入った指定カバンは、いつもよりも舞の足取りを重くしていた。

「あーどうしようね、これ。絶対家に帰りたくないし」

「何言ってるの、舞。アタシよりも点数良いくせにさ」

「でもさ、英数共に四十点台じゃぶっ飛ばされるよ、主に兄ちゃんから」

「そっかー、舞んちってお母さんたちは緩いけど兄ちゃん敵しいもんねー。どこ行ってるんだっけ？ R大？」

「そうそう、今年R大入ったんだけどさ、ちょっと遠い

から一人暮らししてくれることを祈ってたのに、がんばって家から通ってるの。やだよ、今日夕飯終ったら兄ちゃんとマンツーマンだあ」

「いいじゃん、舞の兄ちゃんかっこいいしさ」

たわいも無い話で盛り上がった頃、朝子の家のある曲がり角に差し掛かった。

「あれ、朝子曲がらないの？」

「あ、今日ノノヤでDVD借りるからさ。舞、一緒行かない？」

「別にいいけど」

家にあまり帰る気のしなかった舞は、あつさりと朝子の誘いに乗った。

学区内にあるノノヤは、舞の帰る途中にある。全国展開しているわりに、その店舗はこじんまりしている。しかし中に入ると、CDやDVDが天井まであろうかという高い棚にぎっしりと詰め込まれ、おまけに一人が通るので精一杯という通路の狭さも手伝って、まるで一種の迷路のようだった。

朝子はノノヤに着くなり、自分の興味のあるDVDコーナーへとさっさと行ってしまった。舞もその後が続こうとしたのだが、道を譲ったりなどしてうちに気がつけば見失ってしまったのだった。焦るあまり天井から吊り下げられた案内板が目に入らず、勢いで入ってみたところは、黒に赤字のホラー映画コーナーだった。

「うわっ」

早めに歩けば五秒もかからないのだから、舞は両の棚に並べられている不気味なタイトルには目もくれず、ひたすらその向こうにある海外人気ドラマシリーズへ向かおうとした。

「あなたですね、砂川舞」

寸での所で誰かに後ろから呼び止められた。舞には全く聞き覚えの無かった、甘い女の声だった。

「はい？」

先程の早歩きのスปีドについてきていたんだろうか、という疑問を持ちつつも、舞はくるりとその後ろを振り返った。

後ろにいたのは二人だった。一人はハイヒールをはいた女だった。顔つきは、パンツがそれぞれがはつきりしており、整ってはいたのだがどこか量産型の無表情なバニー人形に似ていた。また、五月を過ぎたばかりだというのにノースリーブのきっちりした服は、看護師の着るそれに似ており、豊かな身体を包んでいた。ただ、短いスカートから出ている足は腿まで延びたニーソックスで済ませている辺り、本業の看護師ではなくただのコスプレかと思わせた。

一人目にしてこの有様だったが、その隣にいた人物は、更に輪をかけた奇妙な男だった。隣の女性とその背丈はさほど変わらないかそれより小さかった。ぼさぼさの肩

まである髪は、後頭部のみならずその顔の右半分も覆っていた。白髪が無い代わりに黒と茶が入り混じった、色調が整っていないその髪は、彼をより汚らしく見せている。生気の無い目は、時折爬虫類のように薄気味悪い光を発した。ただ、そんなゾンビのような頭部とは引き換えに、彼の着ている物は染み一つ無いまっさらな白衣で、その下にはきっちりアイロン掛けされたワイシャツと黒のネクタイが見えていた。

「なあに、小娘じゃあないか。名前からてつきり還暦おばばだとばかり思ってたんだがねえ」

「クス氏、今現在は二十一世紀初頭になります。それに先程の言葉、女性を目の前にしていかがなものでしょうか」

二人はふざけてるつもりだろうが、舞には全くそのようには思えなかった。女性は表情一つ変えず、クス氏と呼ばれた男性は、先程と変わらない死んだ目でただ口元をにやりと歪ませているのだから。

「砂川舞」

立ち去りたい、と舞が思ったと同時にクス氏は言った。

「今はワタシらを不気味と捉えているだろう。それは別に構わない。ただ、理解しなさいな。ワタシらは今ではないいくつかのアンタに呼ばれたからあ、ここにいるんだ」

「は？ 何のことですか。あたしさっぱり分からないから」

くっく、とクス氏の歪んだ口から空気が漏れる。  
「アンタはねえ、近いうちにワタシが、必要になるって事だよ」

この不気味な人物、クス氏に対して舞は二度と会いたくないという印象しかない。なのに、なぜ自分が彼らが必要とするのか。舞はそう言いたかった。だが、先程クス氏に見つめられてからは、のどはびたりと張り付き、体中の筋肉さえもが硬直してしまっていた。辛うじてできるのは、呼吸のみである。それはまるで、蛇を前にした蛙のようであった。

「舞、いたいた。DVD見つけたからさ、借りてくるね」

朝子の声と共に、舞は肩から叩かれる刺激を感じ取った。それが合図になったのか、舞の体は急に緊張状態から解け、勢いよく後ろを振り返ることになった。

「朝子！一人でどっかいかないですよ。もう気持ち悪かったんだからね」

「ごめんごめん。まあ、ホラーコーナーにいりや誰でも気持ち悪くなるよ」

「違くて！なんか変なのに絡まれちゃってさ」

「はあ？」

「朝子、見えなかった？ここにいたキモイ奴」

「何が？今来た時、舞一人で向こう向いてたよ」

「は？ほら、なんか白衣着た変な奴が……」

そう言っただけで舞がクス氏のいた所に視線を戻すと、そこには柵の向こうのレジの風景があるのみだった。立ち去る足音も無かった。

胸の端になんとも言えぬ薄気味悪さを抱えながら、DVDを借りた朝子と共にノノヤを出た。自動ドアから一歩外へ出たときに、あのクス氏の声が、耳元で聞こえた。

「ごきげんよう」  
辺りにクス氏らの姿は無かった。

「おまえさあ、正直あの点数だとY高なんて無理だぞ」  
舞が二つ目の鳥のから揚げをつまんだとき、向かいに

座っていた兄は言った。  
「うるさいなあ。兄ちゃんだって高校は入るとき点数悪かったとか何とか言ってたじゃん。それに去年の今頃だって、R大行けないとか何とかほざいてたくせにさ」

「何言ってるんだ、俺の脳みそはおまえのと造りが全く違うから。勉強しなくても中学校のテストで七十点は下回ったこと無いんだからな。あれじゃY高どころかN高にも行けやしないって」

兄が何か言っている間、舞はつまんだ鳥のから揚げを口に含んで咀嚼した。噛まれて小粒になったから揚げは、

ごつくんと舞の胃の中へ飲み込まれていった。

「大丈夫だよ、まだ五月だし。受験なんてまだまだ先」

「そう思ってるであつという間に受験だぞ。いいか、俺

はおまえを想って言ってやってるんだよ」

「ははっ、随分と優しい人だね、兄ちゃん」

「何言ってるんだ。冬に成績伸びないって泣き付かれたくないんだよ。それに、Y高にも入れない人間が血を分けた兄妹だなんて、人様に言える訳無いしな」

舞の箸を持つ手が止まった。

「こちら、大丈夫よ舞。母さんは舞に元気に高校卒業してもらえれば、何も言うこと無いから。そうね、望みがあるとしたらできれば公立で済ませてほしいわ」

咀嚼する舞の口が止まった。Y高もN高もこちら辺では中位のランクに位置する。中学校からはそノ二つへ進学する人たちが一番多いのだから、いたって普通の高校だ。それを地域一番の進学校へ入った兄は、恥ずかしくて妹とは言えないと言う。そして母は、舞に対して行く高校はどこでも良いと言った。だが舞は覚えている。兄が高校受験のとき、母は兄に言っていた。

『あなたなら、あのK高校に行けるわ』

と。舞と兄とでは、接する態度が異なっていることを、舞は昔から感じ取っていた。

「ごちそうさま」

ことり、と舞は箸を置いた。

「もういいの？ あら、まだご飯残ってるわよ。サラダもあるし」

「もういいの」

「食べなさい」

「いいって言ってるでしょ！」

勢いよく食卓から立ち上がると、家族には目もくれず、舞は自分の部屋へと向かう。熱く湿り始めた目元を見られたくなくて、無意識に駆け出していた。

「兄ちゃんなんかいなければ、比較なんてされないのに。兄ちゃんなんていなければいい……」

部屋のぬいぐるみを抱いて、呪文のように唱えていた。

二時間目の社会の授業、黒板の地方自治の図を書き写していた時だった。突然教室の扉が開き、学年主任がやって来た。

「砂川さん、砂川舞さん、いますか？」

突然の訪問に、教室内がざわついた。首を傾げつつも、舞は手を挙げて存在を教えた。学年主任は手招きした。

それに応じるように、舞は立ち上がり廊下へ出た。

学年主任は、集会で見せる顔とは全く違う深刻な面持ちをしていた。低く、ぼそぼそと舞が呼ばれた理由を口にした。

「砂川さん、さっきご家族から電話があつて、お兄さんが事故に遭われたみたいで。もうすぐお父さんが迎えに来るから、今日はもう帰りなさい」

「え？」

「話したとおりです。この事は先生に言っておきますか

ら、早く支度をして帰りなさい」

舞が教室に戻った時、学年主任は教師と話をしていた。隣の席の女子が、どうしたの？と声をかけてきたが、あはは、と力なく笑いながらカバンに荷物をつめるだけで精一杯だった。

（兄ちゃんが、事故に遭ったの？ 本当に？ ドッキリじゃ、ないよね）

荷物をカバンにつめて、それと共に教室を出るなど、動きは現実を受け入れているのに、頭の中では兄の事故に対して懐疑的になっていた。駐車場に父の乗った車が来るまでは、現実感も無く地面がふわふわとしていた。

父が迎えに来た時、ようやく兄が事故に遭ったということを理解したのだが、それでも否定したい感情がどつと押し寄せてきていた。

「お父さん、兄ちゃん、どうなの？」

「……危ない」

寡黙な父が、信号待ちのときによく口にした一言で、舞の背に寒気が走る。同時に顔が熱くなり、のどが言葉を押し戻す。

「俺も今から向かうところだ。十時頃に事故に遭ったらしい。学校手前の十字路で、トラックに撥ね飛ばされたそうさ。病院で今手術を受けている」

「どこ、いるの？」

「R大学病院だ」

それ以上、父は何も語らなかつた。舞も何も言わなかつた。言つたところで状況が好転するわけでもない。ただ、嫌な情報が次々に入ってくるのみだったのだから。病院に着くと、父は看護師から兄の容態の説明を受けていた。隣にいた舞にも、その状況がどういふものか、破片になつた言葉から想像できた。

「ええ……肝臓が……一部損傷して……」

看護師の言葉は、一応理解はしていた舞の頭に、冷たく鋭く突き刺さる。そのたびに、昨日までの兄の姿が脳裏に浮かんでくる。笑い、怒り、ふざけあつた兄がくつきりと鮮明に思い出された。

（昨日、あんなこと言っちゃつたから？ 兄ちゃんがいないなんて、嘘だよ。兄ちゃんいなくなつてほし

過去の自分の言葉への罪悪感と、兄を失うことへの恐れが、舞の胸をぎうと締め付け、流れ始めた涙を加速させていた。

「お医者さんでも誰でもいいよお、誰か兄ちゃん、兄ちゃん助けてよ」

子どものように舞は言う。悲しみに押しつぶされたのどは言葉を細め、かすれさせた。看護師は気の毒そうにこちらを見て、父に説明を続けていた。母は舞の背中をさすり、今にも泣き出しそうな表情でなだめていた。

その時、薄暗い廊下の向こうからカッタンカッタンと、ヒールの出す足音が聞こえてきた。落ち着いた歩みの足音は看護師や医師、または患者の家族のように思えなかった。死神で無ければそれでいい。舞はそう願った。

「ほおら、やつぱりワタシを呼んだじゃないか」

暗闇から現われたのは、昨日ノノヤで会ったクス氏とその付き人の女性であった。相変わらずクス氏は右目を隠し、気味悪い笑みを顔に浮かべている。

「砂川舞。ダメじゃあないかあ、女性が泣いてしまうのは」

クス氏は舞の目の前に立つと、おもむろに右手を髪の毛で隠されている右目に当てた。ズツという音をたて、クス氏は右目の奥から小さな万国旗を引っ張り出す。色とりどりの、見たことも無い国旗が、あとからあとから伸びてくる。それはあまりにも常識とかけ離れていて、舞は目を見張った。呆気にとられてしまい、しばし涙は出るのをやめた。

「ほら、泣き止みなさい。ワタシが、アンタの兄とやらの命を助けてやろうじゃあないの」

万国旗を取り出し終えたクス氏は、それを舞に渡すと、さも当然のようにそんな言葉を吐き捨てて、手術室へと向かっていった。看護師がそれを止めようとするが、クス氏がやりと彼女を見つめると、彼女は動きを止められてしまった。

手術室の中では、患者を助けるための最大限の努力がなされていた。

「くそう、肝臓の損傷部位が大きすぎる！血が止まらないぞ」

「先生、患者の血圧が低下していつています」

「ここまでか」

医師が大きく息を吐いた時、クス氏はその傍らに立っていた。

「肝臓が損傷しているならば、新しく肝臓を移植すればいい」

「誰だ、お前。それにこの場でなんて事を言うんだ、時間がないんだぞ！そんな事できるか！」

「出来ますよ、ワタシならね。あなたはワタシの指示通りに動いてくれればいい」

クス氏は自信たっぷりに医師へ語る。だが医師は、いつの間にか傍らに来ていたこの男の声を無視し、目の前の患者に黙々と治療を施している。諦めそうになりながらも。

今度はクス氏が大きく息を吐いた。

「ほら、貸しなさい」

そうして医師の手術器具を奪うと、彼が行おうとしていた手順を行い始めた。それも、機械のように正確に、素早く。

「ほら、止血した。あとは、肝臓だな」

ちら、とクス氏は連れてきた付き人の女性を見た。

「さあ、おいで」

彼女は表情一つ変えず、クス氏の声に応えてその傍らへやって来た。

「まず血だな。血が足りなければ、採ればいい」

クス氏はそう言うと、いきなり彼女の胸へ布団針のような採血用の注射針を突き刺した。管を通って黒味を帯びた血液は、患者の体内へ流れて行く。医師たちは、息を呑んだ。

「そんな、消毒もしないまま直接血液を送るなんて……」

「なあに、大丈夫。これは全ての人間の血液に対応しているから」

クス氏は左目を細めながら、手にしたメスでさらに付き人の女性のみぞおちを切り裂いた。彼女は表情一つ変えず、立ったままその切られた腹の傷を広げる。そこにあるべきはずの鮮血は一滴たりとも零れ落ちてはいなかった。

「肝臓、肝臓をとってはくれないか」

クス氏は言ったが、医師の足は動くことが無かった。

「早くしてくれないか。死なせてはならないだろう？」

「急かすようにクス氏は医師のすねを蹴った。」

「いや、お前の腕はわかったけれど、移植など！まして生きてる人間から取り出すなんて言語道断だ！」

「がたがたうるさいね。そいつはワタシの持ち物の臓器

工場なんだから、いくらでもむしりにとって構わないんだよ。ほら、早く！」

医師は洪々、クス氏の付き人である「臓器工場」の女性をもう一つの手術台に乗せ、その開かれた腹へ手を入れた。

「早くしておくれよ、血圧がかなり低くなっているんだから」

手術室から、クス氏が出てきた。その後ろに、クス氏の付き人の女性が、表情一つ変えずに続く。

「砂川舞」

涙を流しきった舞の目の前に、クス氏が立ち塞がった。

「ワタシはアンタの兄とやらの命をつないであげたよ」

舞はクス氏を見上げた。慌しい手術を終えたというのに、汗の一粒も流さず、にやりとした薄気味悪い笑顔は変わらない。

その後ろを、兄を載せたベッドが運ばれて行く。父は医師に、病室の所在を告げられた後、話があるのであとで来てほしいと言われていた。

「ごきげんよう」

クス氏はそして女性と共に暗い廊下の向こうへと消えていった。舞はその後姿を、涙で麻痺した顔面で、一生懸命笑顔を作りながら見送っていた。

個室に運ばれた兄を前にして、医師は言った。

「私どもも一時、存命を諦めたのですが、先程の医師のおかげで、一命は取り留めることが出来ました。ですが、長らく低血圧状態が続き、それに伴いまして脳に酸素が回らず、ご覧の通りです」

しゅー、しゅーと人工呼吸器の無機質な息の音が部屋中に充満する。

「あの、回復の見込みは？」

医師は母の問いかけに一呼吸置いた。

「残念ですが、人工呼吸が無ければ生きることが出来ません。それに、意識が戻る可能性はもうゼロでしょう」

「じゃあ、寛人は……」

「ご家族の皆様、どうしますか？ 尊厳死として、人工呼吸器を外しますか？」

「ああ、そうして下さい。もう寛人は、寛人はここにいないのだから……」

父は、医師にそう言った。医師が人工呼吸器のスイッチに触れた瞬間、部屋の入り口が開いた。

電灯の光によって、陰影がくつきりと映し出されたクス氏が立っていた。

「ははは、許さないよ。ワタシのつないだ命だ。何度潰そうとも、ワタシは何度でもつなぎとめてやる。死ぬな

んて、絶対に許さない。一つしかないんだから、命は、大切に」

悲しいとも悔しいとも、嬉しいとも言えない複雑に絡み合った感情が、舞の心を押し潰した。